

編集長から

## 戦後 70 年に思う

増田 一世

戦後 70 年の節目の 2015（平成 27）年、与党が圧倒的多数を占める国会で「平和安全法制」の審議が始まっている。10 本の法律をまとめて審議するという乱暴な進め方も問題だが、平和を名乗りながら、戦争できる国へと大きく舵を切る内容に抗議の声が高まっている。野党議員や多くの市民から「戦争法案」と呼ばれ、老若男女が参加し、全国各地で、国会周辺で反対運動が繰り広げられている。

「戦争」が人々にどのような影響を及ぼすのか、過去の歴史から学ぶ報道や書籍も目につく夏だ。そんな中、名古屋市美術館で開催されている「画家たちと戦争展」に足を運んだ。その概要を示す文章の中に『戦争』は、画家の芸術にとって圧倒的な事件として存在しています。日本の近代美術の歴史において、1931 年の満州事変から始まり、1945 年の太平洋戦争に終わった 15 年戦争が画家たちに与えた影響は極めて重大です」とあった。そんな一文に心が動いた。戦前、戦中、戦後を生き抜いた 14 名の画家たちが各時期に制作した作品を展示してあった。戦争は画家たちの人生を大きくねじ曲げたのだ。

1938（昭和 13）年には大日本陸軍従軍画家協会が結成、1939（昭和 14）年には陸軍美術協会（藤島武二、藤田嗣治、小磯良平、中村研一など）が結成され、第 1 回聖戦美術展が開催されていく。戦争を美化し、国民の意識を戦争に駆り立てていく戦争画展だ。こうして画家たちも戦争に参加させられていったのだ。従軍画家として戦場に赴く者もいた。

一方でシュルレアリスム（20 世紀の芸術思潮の 1 つ）への弾圧も厳しくなり、画家が治安維持法違反の嫌疑で検挙・拘束されるようになる。

国家権力によって「表現の自由」が奪われ、戦争に協力することを強いられ、多くの画家たちはその中で悩み、葛藤したのだ。

展示を見ていくと、戦争画は必ずしも戦意高揚を意図した作品ばかりではなかった。戦争の悲惨さ、戦場で死にゆく人たちの姿を表したものもあった。戦争画家として戦争協力をした画家の中には、戦後しばらくは制作ができず、戦後死者の霊を弔う作品を描くことで、やっと自らの画風を取り戻し、描き始めた人もいた。

戦争とは巨大な国家権力が引き起こすものだと思つて改めて思った。国家権力の暴走に歯止めをかける日本国憲法の大切さを噛みしめる 2015 年 8 月である。